

「今日の説教、聴き手のために」 2012/12/2 明治学院教会 (295)

(このプリントは毎週作っているものです)

牧師 岩井健作

「主と共なる宴」 ルカ 5章 27節-32節。

選句 「そして自分の家でイエスのために盛大な宴会を催した。そこには徴税人やほかの人々が  
大勢いて、一緒に席に着いていた。」(29節)

- 1、ルカ福音書の「レビを弟子にする」という物語から学ぶ。27節。「出て行く」イエスと「座っている」レビの対比が鮮やかである。レビとは誰か。ローマ帝国下の属領地の支配者ヘロデの配下の徴税人である。権力を傘に着て民衆を苛酷に搾取し、私腹を肥やしてさえいた下級官吏である。同胞の憎悪の目は、収税人を軽蔑する構造と共に彼の上に重くのし掛かっていた。当時の宗教家パリサイ人たちがこれを「罪人」と断じた(30)。座っている姿には、被差別者の影と憂いが漂う。彼の内面の孤独はいかばかりであったか。「座っている」とは魂の身動き出来ない、暗く重い姿である。他方ルカのイエスは旅の途上にある。『旅空に歩むイエス』(三好迪著 講談社)はルカの解説書の書名である。旅は何処へ。「十字架」の受難の地エルサレムに向かう。「十字架」へと旅するイエスと虚ろなレビとが出会う。
- 2、イエスは彼に「従ってきなさい」と声をかける。マルコは「立ち上がって」とだけあるのに、ルカは「何もかも捨てて立上がり」と「捨てた」ことを強調する文言を挿入する。ルカは「富・財産・持ち物」へのこだわりがある。「マルコ」はこだわるには何も持たない民衆が主役であったのであろうか。しかし主な関心をそこおく必要はない。「立ち上がり、イエスに従った」という句にこの物語の主題がある。レビの内面的経過は一切記されていない。何故従ったのか。躊躇はなかったのか。レビの気持ちにはいろいろ語られるべきことは沢山あったであろう。迷い、不決断、いや決断、感動。しかし、それらを一切包み込んで「招き」と「応答」の出来事だけが記されている。「召命記事」とはそのようなものである。魂の閉塞にあった人間が「十字架」への道行きに同行する。驚くべき出来事である。「死んでいたのに生き返り」(ルカ 15:24, ロマ 11:15)とはルカの通奏低音である。我々もレビに投影されている、招きと応答の構造を自らのものと自覚して生きてゆきたい。
- 3、その後、レビは食事の席を設ける。(ルカは食事に積極的意味を持たせる記事をたくさん書いている。それは食事を神と人、人と人との交わりの回復のしるしとして認識しているからであろう)。マルコが「食事」とした所を、ルカは「宴会」と書き替える。恐らく、レビによって、ほかの徴税人や疎外され差別されていた人達が招ねかれたのであろう。己の力で招いた宴会ではない。己を捨て、己をむなしくして奉仕した食事であった。「主と共なる」の意味がここにある。レビは独りが救われたのではない。神からの和解(救い)を人々との交わりに具体化した。己を捨ててイエスに従う。この一事が宴(食事)の質を、人間的、自己誇示的なものではなく、「主と共なる宴」に変えたのである。テーブルには見えないけれど、そこにイエスの席を自覚する時、例え独りの食事であっても、それは開かれた「宴」となる。今、世界の飽食と飢えはテーブルを同じくしてはいない。だが、多くの開かれた宴への働き、助け合いの働き、現代の「炊き出し」の文化が、主が共にいます宴の象徴として行われていることは恵みである。今年もクリスマスの季節、支援を求める働きは洪水のように届いている。祈りを持って受け止めたいと思う。身近な日本基督教団神奈川教区寿地区委員会が運営している「炊き出し」の働きも祈りを持って覚えて行きたい。